

## 第39回 福島県建築文化賞 各作品賞 講評

### 【正賞】

#### 『みなみあいづ森と木の情報・活動ステーション きとね』

町土の90%以上を森林が占め、林業を核とした地域振興に取り組んできた南会津町が、町産材の価値を高めるとともに、地域経済の活性化や林業等に関する情報発信などを目的に整備した交流拠点施設である。地場の製材所で加工した木材を、縦ログの基壇の上に重ね梁として載せて広々とした空間を実現している。地場産の木の特性を十分に理解し、内部も架構の良さが表現されており、優しく来訪者を包み込んでいる。また、これまで培ってきた構法を駆使して木材を使いこなした建物となっており、各地で南会津産木材の評価が高まり、需要が伸びるようプロモーションするなど今後の活動が期待される。地元の林業、建設、建築に携わる人々の知識や経験、技術を結集し、伐採から加工、建方まで一貫して町内でやり遂げたことは素晴らしい価値があり、南会津町の熱い意気込みが伝わってくる建築である。

### 【準賞】

#### 『コミュニティサポートセンター アルベロベッコ』

障がい者の住まいと活動の場、地域住民のためのシェアスペースを持ち、緊急時には避難拠点にもなる地域の障がい者の生活支援拠点である。方形屋根を連結させた住宅群のようなユニークな外観が、周囲の緑深い自然環境と調和して、安らぎと親近感をもたらしている。山型の木造垂木が印象的な施設内部は、リビングルームを囲んで個室が配置され、このリビングルームがさらに大きなダイニングルームに繋がることで、廊下のない平面が実現されている。所々に中庭を挿入することで、どの部屋も明るく、ガラスの開口部により施設の奥まで見通せる開放的な空間となっている。多くの時間を室内で過ごす障がい者にとって、木の温かみが十分に感じられる快適な住空間を実現している。

## 【優秀賞】

### 『ゼノアック本館』

国内外からの訪問客を迎え、事業内容を公開し交流を広める上での迎賓機能や展示機能を合わせ持つ開かれた社屋である。丘陵地帯の地形をうまく利用した絶妙な配置計画であり、外観は石貼りなどが効果的に使われ、プロポーションも良く、落ち着いた佇まいを見せている。エントランスホールをはじめ、展示室や応接室、レセプション室などの各室は、木の典雅な質感を保った端正な室内空間と調度品で統一され、上質な建築デザインとなっている。国内外からの訪問客を迎える空間としてふさわしい風格のある建築である。

### 『てぞーろ保育園』

福島市のシンボルである信夫山の北側に密集する住宅地にあり、道幅が狭く手狭な敷地の中で、曲面の外周壁で囲んだモダンな箱形のひときわ特徴的な外観が印象的である。RC造の外周壁と木造の園舎が一体化され、既存園舎との関係性にも配慮された無駄のない配置計画となっている。内部空間は、児童施設の運営プログラムと立体的なプロムナード動線が上手に組み合わせられ、職員による管理や園児の生活が有機的かつ効率よく運営できる計画となっている。子供たちが楽しむことのできるスペースが至るところに造り込まれ、遊びと生活、学習の要素が高いレベルで融合されている。

### 『やがわせミクストコミュニティ enva』

地域コミュニティの再生を目指し、設計者の事務所の隣に建つ築50年を超える古い空き店舗をカフェ及び多目的スペースとして改修した建築物である。2階はサッシを残して曲面パネルシャッターを設置したテラス風の空間となっており、実に気持ちが良い。周辺住民の交流を促す建築は、人々の日常生活に安息をもたらすとともに地域の絆を強める空間として機能することが期待できる。人と人の縁が繋がる場を創ることで、地域をより良くしていこうとする活動は評価に値する。運営内容も住民参加が期待され、このような改修の連鎖が街並みづくりへ大きく貢献するであろう。

## 【特別部門賞】

### 『二本松市歴史観光施設「にほんまつ城報館」』

東側に建物を開き、「昔の武士たちのアプローチ」を継承した配置計画となっているこの建物は、二本松市の歴史と観光の重要な拠点である国指定史跡二本松城跡へのアプローチ空間であり、歴史への理解を深めるための観光拠点施設でもある。二本松の古い町並みや今日に至るまちの成り立ちを十分に調査・研究しながら計画され、都市デザイン的手法を重視し、ランドスケープと建築の調和が図られている。二本松城跡へ向かう来訪者のゲートであると同時に、市の歴史・文化に関する基礎的な情報を提供する資料館としての機能を十分に果たしている。

### 『母畑温泉 八幡屋 帰郷邸』

昔ながらの大規模温泉旅館に現代のニーズに合わせた食事処・露天風呂等を増築したものである。石川町から産出された天然石をダイナミックに配置して雄大な景観を見せる庭園を造成し、室内の随所にも天然石を素材とする建築内装デザインを施して、町の風土性にも適った味わい深い建築となっている。露天風呂そのものはシンプルながらゆったりと身を投げ出して自然と人工物の融合を五感で感じ取ることができそうで、土木と建築、造園それぞれの技術と感性が織りなす景観を堪能できる。

### 『三春きたまち蔵』

座敷蔵、倉庫蔵の2つの土蔵を貸事務所と町内観光案内所として再生・利活用し、併せて公衆トイレを整備した観光情報の発信拠点施設である。古い土蔵の持ち味を大切に残しながら、現代のプログラムに生かされるように、さりげなく改修などを行っている。古い歴史の佇まいを持つ中心市街地に残された蔵に光を当て、背後の森林「花の丘公園」の利用と連動しながら、地域コミュニケーションの場としての役割を期待した計画となっている。座敷蔵2階の木造トラス空間は、様々なイベントの企画が可能で今後の活用が期待される。

## 【復興賞】

### 『共生サポートセンター さくらの郷』

避難指示が解除された町に帰還する住民のために計画した特別養護老人ホームと町民センターである。緑豊かな木々に囲まれ広々とした環境が確保され、利用者にとって快適な施設となっている。内部の木質が良い雰囲気、廊下の梁など大きな部材を大胆に使用しているオープンスペースとプライベートの空間が無理なく繋がり、居住者への対応がスムーズである。窓から陽光が差し込み、温かい居住空間を作り出しているこの施設を核に、故郷に帰った人達の交流が深まることを期待したい。

### 『福島県浪江ひまわり荘』

東日本大震災により浪江町にあった救護施設を西郷村へ仮設として移し、7年間プレハブでの運営を余儀なくされていた同施設を新たに整備したものである。利用者は、遠い山並みを望む平坦な土地でゆったりと時を過ごすことができ、幅員が変化する廊下や日だまりの窓辺は、利用者それぞれのお気に入りの居場所となっている。廊下、食堂、ホールは天井高を上げて高窓をとり、木の構造が見えるようにするなどの工夫がなされている。通路や室内全体にゆとりを持たせ、利用者が健康で安心して長期間の日常生活を送る場として十分に対応可能なメリハリを利かせた設計となっている。

### 『Smart Wellness Town PEP MOTOMACHI』

郡山市の医療を長年支えてきた小児科クリニックの移転新築に伴い、まちづくりの視点から計画された健康まちづくり推進プロジェクトである。小児科クリニック棟には、絵本2千冊を蔵書した図書館のような待合室が配置され、子供たちの居場所となるような診療所となっており、薬局・子育て支援棟では、旧仮設住宅の縦ログ資材を再利用するなどの意欲的な試みを行っている。ロハス広場の名のもとに、空洞化した都市中心部の地域コミュニケーションの活性化につなげようとした建設の趣旨も意義深く、健康・医療を核として中心市街地に新たな芽吹きを予感させる。

(※優秀賞、特別部門賞、復興賞については五十音順。)